

青年期・成人期の発達課題に関する考察

—就職及び結婚に関する大学生の意識—

向後 礼子*・豊川 輝**・神谷 直樹***

1. はじめに

大学時代は発達段階でいえば青年期に位置づけられる。もっとも青年期という時期が発達段階に位置づけられることになった当初は、概ね、高等学校卒業時までをその対象年齢としていた。青年期とは来るべき成人期に向けて準備をする段階と考えられていたが、当時は高等学校を卒業した段階で職業人生を始めることが多かったからである。

これは、発達課題論の提唱者として知られるハヴィガーストがあげた青年期の課題をみるとよくわかる。ハヴィガーストの青年期の課題は学校時代を終え、一人前の“おとな”として社会に出ていく時期に達成することが求められる課題であり、成人性の獲得につながる課題である。このことは、次の成人前期の課題と比較してみると明らかである（表1）。

表1 ハヴィガーストによる青年期・成人前期の発達課題（1972）

青年期の課題	①同世代の男女の友人と新しい、成熟した人間関係を結ぶ ②男性あるいは女性としての社会的役割を身につける ③自分の身体的変化を受け入れ、身体を有効に使う ④両親や他の大人から情緒的に独立する ⑤結婚と家庭生活の準備をする ⑥職業に就く準備をする ⑦行動の指針としての価値観や倫理体系を身につける ⑧社会人として責任ある行動をとる
成人前期の課題	①配偶者を選ぶ ②結婚した相手と一緒に生活していくことを学ぶ ③家庭を形成する ④子どもを育てる ⑤家庭を管理する ⑥職業生活をスタートさせる ⑦市民としての責任を引き受ける ⑧気のあう社交のグループを見つけだす

出典：兄玉憲典・飯塚裕子訳（1997）『ハヴィガーストの発達課題と教育』川島書店

* 近畿大学教職教育部講師

** Pacific Lutheran University

*** 立教大学

ところで、現在ではどのくらいの若者が大学生であることを選択するのだろうか。平成22年度の学校基本調査によれば、高等学校（全日制課程・定時制課程）の卒業者うち、54.3%が大学等へ進学し、いまや2人に1人以上が大学生を経験するのである。したがって、多くの若者にとって青年期はかつてよりも延長されているといえる。さらに、大学を卒業したとしても必ずしも職に就く（就ける）というわけでもない。厳しい雇用情勢等を背景に就職を先送りして大学院に進学したり、フリーターを選択する、あるいは、選択せざるを得ない若者が増えるなど、青年期・成人期の課題との対応が曖昧になり、移行の境目がはっきりとしない現状にある。また、こうした現実、青年期に達成すべき課題を先送りするという結果をもたらす可能性が高い。

結婚に関しても、国勢調査によれば2005年時点で、男性の約6人に1人、女性の約14人に1人は、1度も結婚をすることなく50歳を迎えている。このような時代にあって、大学生は“おとな”になることをどのように捉えているのか、また、将来の自分についてどのような像を描いているのか、2つの調査結果に基づいて考察したい。

2. 大学生が考える“おとな”とは：「進路並びに成人性に関する調査」の結果から

(1) 調査の概要

首都圏の大学生1年生279名（平均年齢18.9歳±1.01 男性200名・女性79名）を対象に行った調査では、①「成人（おとな）」と考える年齢、②「成人（おとな）」とみなされるために必要とされる課題について尋ねた。

なお、②の調査項目に関しては、Arnett（1997；2003）が成人性の概念を検討するために構成した36項目のうち、年齢を直接的に尋ねる項目を除いた32項目を用いた（表2）。また、課題の必要度に関しては、「1. 全く必要ない」～「5. 絶対必要である」の5段階で評価を求めた。

(2) 結 果

1) 成人（おとな）と考える年齢について

279名中、年齢の指定がなかった24名を除く255名の平均は21.8±3.15歳であった。その内訳についてみると最も多い回答は、法律において成年に達する20歳であった（表3 網掛け部分）。ただし、高校卒業（18歳）、大学卒業もしくは大学院（修士課程）修了の年齢である22歳～25歳にも一定の回答がみられた。また、26歳以降の回答は減少するが、30歳より上の年齢を記入

表2 調査票で用いた課題(1)

1	親から経済的に自立している
2	親と同居していない
3	(高等学校の)教育を終了している ③では、()内は表記していない
4	結婚している
5	少なくとも子どもが一人いる
6	長期の仕事に落ち着いている
7	正規雇用の仕事に就いている
8	自分の家を購入する
9	親や他人の影響を受けずに自分の信念や価値を決められる
10	親と対等の大人としての関係を結ぶ
11	自分の感情をいつもうまくコントロールできる
12	情緒的に親に依存しない
13	長期的な恋愛関係を続けている
14	過度にお酒に酔わない
15	二人以上の相手と同時に性的関係をもたない
16	車の制限速度を守って運転する
17	飲酒運転をしない
18	万引きや器物破損といった小規模な犯罪を犯すことを避ける
19	卑俗な／下品な言葉遣いをしない
20	性交渉をもつときには避妊具を用い、妊娠し(させ)ないように努める
21	子どもを産むことができるようになる(女性)
22	子どもをつくることができるようになる(男性)
23	身長が十分伸びきる
24	性的関係をもつようになる
25	運転免許証を取得している
26	選挙権を得ている
27	自分の行為の結果に対して責任をもつ
28	生涯つき合えらと思える友人を得る
29	家族を経済的に支えることができる(男性)
30	家族を経済的に支えることができる(女性)
31	自分の子どもの世話をすることができる(男性)
32	自分の子どもの世話をすることができる(女性)
33	世帯をもつことができる(男性)
34	世帯をもつことができる(女性)

表3 「成人(=おとな)」と考える年齢

年 齢	人数 (%)	年 齢	人数 (%)	年 齢	人数 (%)
17歳以下	7 (2.5%)	22歳	18 (6.5%)	27歳	1 (0.4%)
18歳	22 (7.9%)	23歳	27 (9.7%)	28歳	2 (0.7%)
19歳	7 (2.5%)	24歳	15 (5.4%)	30歳	14 (5.0%)
20歳	103 (36.9%)	25歳	33 (11.8%)	年齢指定なし	24 (8.6%)
21歳	2 (0.7%)	26歳	4 (1.4%)		

した者はおらず、年齢の期限はないと回答した者を除くと少なくとも31歳以上については成人（おとな）と考えていることが分かる。

2) 課題達成の必要度

34項目に関して、「人が一般的に成人（おとな）」と見なされるためには、各項目がそれぞれ、どの程度達成されている必要があると思うか」について5段階で尋ねた結果について図1に示す。

図1から分かるように、平均3.0以下の評価となった項目は34項目中14項目あり、特に結婚や子どもを持つことに関する評価は、2.0以下と低かった（「少なくとも子どもが一人いる：1.8±1.05」「結婚している：2.0±1.11」）。その一方で、「自分の子どもの世話ができること」に関する評価は、男性・女性を問わず4.0を越えており、高い評価となった（男性：4.2±0.96／女性：4.3±0.93）。したがって、結婚し、子どもを持つかどうかは、成人（おとな）であることの要件ではないが、子どもを持つのであれば、その世話ができなくてはならないと考えていることが分かる。

一方、評価点が4.0を上回り、達成の必要度が高いと評価された項目は、上記の子育てに関する2項目以外に4項目あった。そのうち、「自分の行為の結果に対して責任をもつ：4.6±0.73」「万引きや器物破損といった小規模な犯罪を犯すことを避ける：4.4±0.95」の2項目は、ハヴィガーストの青年期の課題である「⑦行動の指針としての価値観や倫理体系を身につける」「⑧社会人として責任ある行動をとる」と関連のある項目といえる。

他の2項目は「親から経済的に自立している：4.3±0.81」並びに「家族を経済的に支えることができる（男性）：4.1±1.04」であり、「職業に就く準備」をして「職業生活をスタートさせる」という青年期から成人期への移行の課題の達成といえる。

しかしながら、経済的な自立と関連が深いと考えられる「正規雇用の仕事に就いている（以下、正規雇用の仕事）」「長期の仕事に落ち着いている（以下、長期の仕事）」の評価はいずれも高いとはいえない。そこで、「親から経済的に自立している（以下、経済的自立）」と「正規雇用の仕事」「長期の仕事」の回答傾向に関して χ^2 検定による分析を行った。

その結果、「経済的自立」と「正規雇用の仕事」では1%水準（ $\chi^2 = 41.68$, $df = 16$, $p < .01$ ）で、「長期の仕事」では5%水準（ $\chi^2 = 31.12$, $df = 16$, $p < .05$ ）で有意差が認められた。

また、残差分析の結果、「経済的自立」と「正規雇用の仕事」では、同じ値を回答する傾向が強いことが示唆された。すなわち、「経済的自立」の重要度をどう考えるかと「正規雇用の

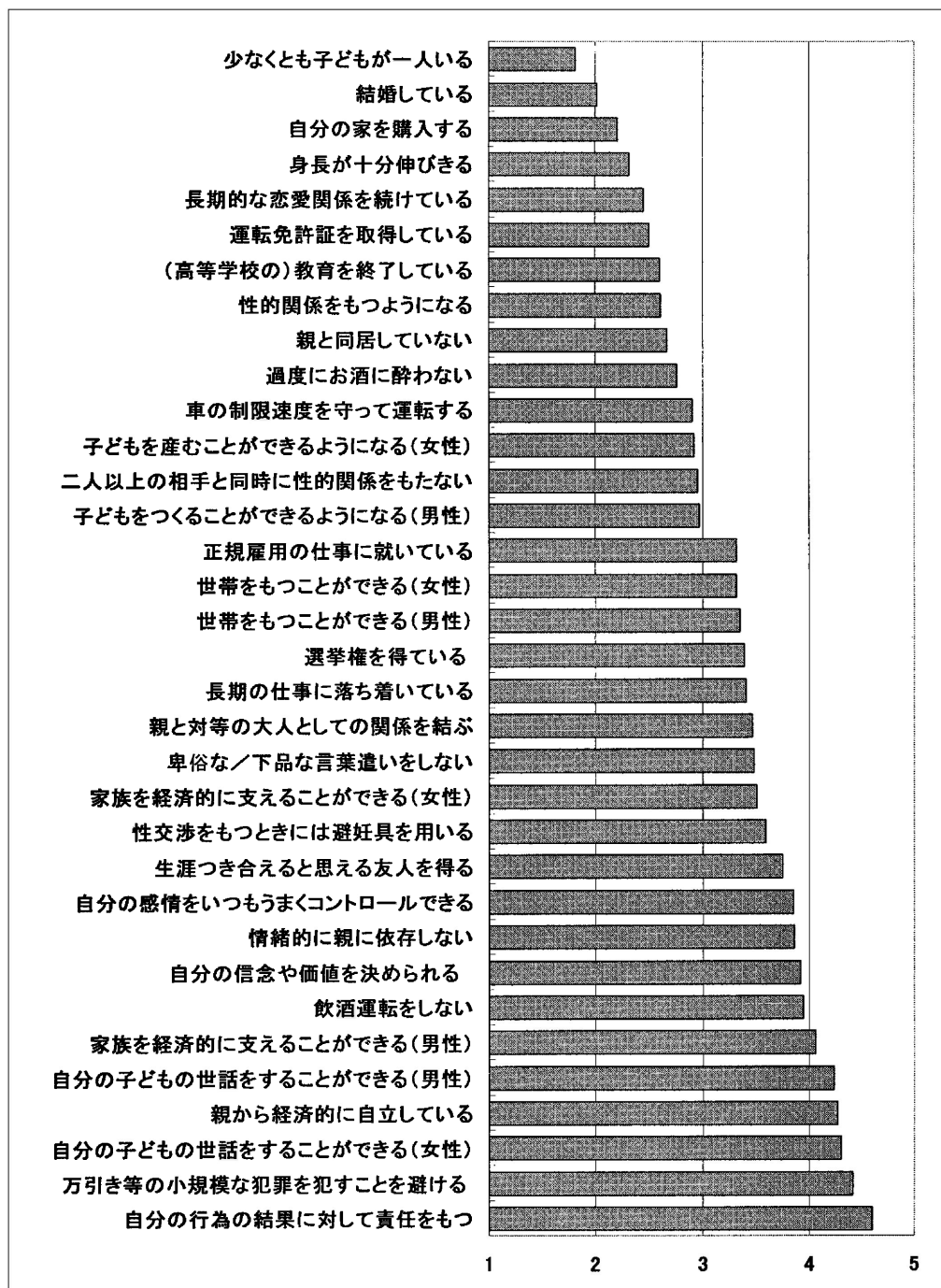


図1 課題達成の必要度

仕事」の重要度をどのように考えるかには一致した傾向があるといえよう。また、「長期の仕事」に関しては「全く必要ない」もしくは「絶対必要である」と回答した者は「経済的自立」でも同様の傾向があることが示唆された。（表4）。

表4 経済的自立と正規雇用・長期の仕事の回答傾向

			正 規 雇 用					合 計
			1	2	3	4	5	
経 済 的 自 立	1	度 数	2	0	0	0	0	2
		%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	3.8**	－0.4	－0.9	－1.1	－0.6	
	2	度 数	1	1	0	3	0	5
		%	20.0%	20.0%	0.0%	60.0%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	0.5	0.9	－1.4	1.1	－0.9	
	3	度 数	3	3	18	10	3	37
		%	8.1%	8.1%	48.6%	27.0%	8.1%	100.0%
		調整済み残差	－0.8	－0.2	2.9**	－1.2	－1.2	
	4	度 数	15	9	29	47	7	107
		%	14.0%	8.4%	27.1%	43.9%	6.5%	100.0%
		調整済み残差	0.7	－0.3	－0.5	2.2*	－2.9**	
	5	度 数	13	12	33	40	30	128
		%	10.2%	9.4%	25.8%	31.3%	23.4%	100.0%
		調整済み残差	－1.0	0.2	－1.0	－1.5	4.0**	
合 計	度 数	34	25	80	100	40	279	
	%	12.2%	9.0%	28.7%	35.8%	14.3%	100.0%	

			長 期 の 仕 事					合 計
			1	2	3	4	5	
経 済 的 自 立	1	度 数	2	0	0	.0	0	2
		%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	3.9**	－0.5	－0.8	－1.1	－0.7	
	2	度 数	1	1	0	3	0	5
		%	20.0%	20.0%	0.0%	60.0%	0.0%	100.0%
		調整済み残差	0.6	0.7	－1.2	1.0	－1.1	
	3	度 数	2	6	12	11	4	35
		%	5.7%	17.1%	34.3%	31.4%	11.4%	100.0%
		調整済み残差	－1.2	1.5	1.8	－0.8	－1.1	
	4	度 数	14	10	24	43	14	105
		%	13.3%	9.5%	22.9%	41.0%	13.3%	100.0%
		調整済み残差	0.7	－0.3	0.2	0.8	－1.6	
	5	度 数	13	11	25	47	32	128
		%	10.2%	8.6%	19.5%	36.7%	25.0%	100.0%
		調整済み残差	－0.7	－0.8	－1.0	－0.4	2.7**	
合 計	度 数	32	28	61	104	50	275	
	%	11.6%	10.2%	22.2%	37.8%	18.2%	100.0%	

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

(3) 性差についての検討

男女の回答傾向の違いについて、おとなとみなされる年齢及び各課題の必要性に関して、 χ^2 検定による検討を行った。その結果、年齢に関しては、有意差は認められなかった。一方、必要性に関しては、性差をあらかじめ見込んだ8課題を除く26課題中6課題において有意差が認められた。

1%水準で有意差が認められたのは4課題であった。このうち、「車の制限速度を守って運転する ($\chi^2 = 13.93$, $df=4$, $p<.01$)」「性交渉をもつときには避妊具を用い、妊娠し(させ)ないように努める ($\chi^2 = 21.14$, $df=4$, $p<.01$)」「自分の行為の結果に対して責任をもつ ($\chi^2 = 14.20$, $df=4$, $p<.01$)」に関しては、女性の方がその必要性が高く評価されていた。一方、「運転免許証を取得している ($\chi^2 = 15.49$, $df=4$, $p<.01$)」に関しては、男性の評価が高かった。こうした結果からは、おとなとみなされるために必要な要件として、女性の方が社会的な規範を守ることや行為の結果に責任を持つことをより強く意識しているといえよう。

また、5%水準で有意差が認められたのは、「親と同居していない ($\chi^2 = 10.54$, $df=4$, $p<.05$)」「少なくとも子どもが一人いる ($\chi^2 = 10.54$, $df=4$, $p<.05$)」の2課題であった。いずれに関しても女性の方が、より必要性が低いと評価されていた。

上記のように一部に回答傾向の違いが認められたものの、26課題中18課題については有意差は認められず、結婚や職に就くこと、経済的自立などに関する性差は少ないと考えられる。

2. 青年期・成人期の課題の達成可能性：「成人性並びに将来展望に関する調査」の結果から

(1) 調査の概要

おとなになること(成人期への移行)のためには、達成したいと考える課題をどの程度、達成可能と考えているか、また、その課題の達成に関して、どの程度、自分のコントロール下にあると考えているか、などに関連が深いと考えられる。

そこで、首都圏の大学生137名(平均年齢20.4歳 \pm 1.12 男性67名・女性68名、不明2名)を対象に調査を行った。調査では、①将来の課題・目標としての重要度(「1. 全く重要でない」～「5. 非常に重要である」の5段階評価)、②課題の達成・実現可能性(確率を%で記入)、③課題の達成・実現に関してどの程度、自分のコントロール(自分の努力や能力)下にあるか(「1. 全く自分のコントロール下でない」～「5. 全く自分のコントロール下にある」の5段階

評価)、④課題が達成されると考えられる年齢について尋ねた。

調査項目は、調査(その1)と共通する10項目と Esther S. Chang.et.al (2006) の論文等を参考に加えた5項目の15項目から構成された(表5)。

表5 調査票で用いた課題(2)

1	大学を卒業する
2	正規雇用の仕事に就く
3	恋愛関係を維持、発展させる
4	経済的に自立する
5	結婚する
6	自分の行為の結果に責任をもつ
7	子どもをもつ
8	親から情緒的に独立する
9	他人の影響を受けずに、自分の信念や価値を決められる
10	自分の感情をうまくコントロールする
11	人間として成長する
12	趣味を楽しむ
13	親の家から出て、自分のアパート・家に住む
14	自分の親を経済的に支援する
15	自分にとって天職を見つける

(2) 結 果

1) 課題の重要度と達成可能性について

15課題に関して、各課題の重要度とその課題が達成可能であると考える確率(以下、達成可能性)について表6に示した(課題は重要度の高い順に並べ替えた)。

度数が6以上の項目についてみると、いずれも重要度が高いと回答した者ほど、その達成可能性の確率を高く見積もっていることがわかる。また、各課題については調査によって質問の仕方(「必要か」「重要か」)が異なるため、直接的な比較はできないが、「進路並びに成人性に関する調査」における回答において「必要度」が高かった「経済的に自立する」「自分の行為の結果に責任を持つ」に関しては、重要度は高く、一方、「必要度」の低かった「結婚する」「子どもをもつ」に関しては、重要度は低く評価されていた。

なお、最も達成可能性が高いと見積もられていたのは、「大学を卒業する(91.6%)」であり、最も低く見積もられていたのは「天職を見つける(58.4%)」であった。また、「経済的に自立する(81.5%)」「正規の仕事に就く(81.2%)」に関しては、いずれも約8割であった。

表6 各課題の重要度と課題が達成可能であると考える確率

上段：重要度 下段：達成可能性	1 (%)	2 (%)	3 (%)	4 (%)	5 (%)	平均 (%)
経済的に自立する	0 0.0%	0 0.0%	3 46.7%	22 72.5%	112 84.2%	4.8 81.5%
人間として成長する	1 5.0%	0 0.0%	5 42.0%	28 71.4%	103 81.2%	4.7 77.2%
自分の行為の結果に責任をもつ	0 0.0%	1 60.0%	4 62.5%	37 72.2%	95 83.0%	4.6 79.3%
大学を卒業する	1 50.0%	1 100.0%	9 76.7%	25 84.0%	101 95.2%	4.6 91.6%
自分の感情をうまくコントロールする	0 0.0%	1 70.0%	5 62.0%	55 71.2%	76 74.9%	4.5 72.9%
正規雇用の仕事に就く	2 50.0%	1 50.0%	11 64.5%	37 75.4%	86 87.0%	4.5 81.2%
親から情緒的に独立する	2 60.0%	4 61.3%	15 57.3%	37 72.8%	79 84.2%	4.4 77.2%
他人の影響を受けずに、自分の信念や価値を決められる	0 0.0%	2 30.0%	12 59.2%	61 68.5%	61 75.1%	4.3 70.1%
趣味を楽しむ	0 0.0%	3 60.0%	22 56.6%	43 74.3%	69 88.1%	4.3 78.1%
自分にとって天職を見つける	2 6.5%	4 20.0%	27 43.0%	43 62.6%	61 66.5%	4.1 58.4%
自分の親を経済的に支援する	3 29.3%	7 25.0%	34 52.4%	47 66.5%	46 78.4%	3.9 64.1%
親の家から出て、自分のアパート・家に住む	5 66.0%	10 52.5%	32 67.2%	42 78.0%	48 91.2%	3.9 77.8%
結婚する	12 18.8%	5 44.0%	33 53.0%	38 71.6%	49 80.6%	3.8 64.7%
子どもをもつ	7 21.6%	12 35.0%	32 50.2%	40 68.0%	45 82.2%	3.8 63.2%
恋愛関係を維持、発展させる	8 10.9%	16 27.9%	36 54.0%	37 67.2%	39 83.8%	3.6 60.6%

2) 課題達成の見積もり

各課題が達成されると考える年齢とその課題の達成・実現に関してどの程度、自分のコントロール（自分の努力や能力）下にあるか、また、どのくらいの確率で達成されると考えるかについて表7に示した（課題は達成年齢順に並べ替えた）。

結果からは、大学生が描く将来のイメージが読み取れる。具体的には、『22～23歳で大学を卒業し、独り暮らしを始め、正規雇用の仕事に就く。同時に自分の行為の結果についても責任をもてるようになる。人間関係の面では、恋愛関係を維持、発展させ、精神面では、親からの情緒的な独立を果たし、自分の感情がうまくコントロールできるようになり、自分の信念や価値観を他者の影響を受けることなく決められるようになる。その後、25歳の時点では、経済的な

独立を果たし、趣味を楽しむようになる。28歳くらいで結婚し、子どもをもうける。その頃には人間的な成長が果たされており、30歳手前では、天職に出会う。そして、30歳を越える頃には、親を経済的に支えるという役目を担うようになる』というものである。

こうした並びに順に関しては、ハヴィガーストが挙げた青年期・成人期の課題と大きな齟齬は認められない。しかしながら、達成年齢に対して、その時期の課題が自分のコントロール下にあると考えているかに注目してみると、正規雇用の仕事に就くことや、恋愛、結婚、子どもを持つことなどに関しては、いずれも4.0以下であり、他の課題より低い。確かに、これらの課題を達成するためには“相手（企業・恋人など）”からの合意が必要であることを考えれば、妥当な結論といえるかもしれない。ただし、正規雇用の仕事に就くことに関しては、他の課題よりも達成の確率が高く評価されていた。

表7 課題の達成年齢・コントロールに関する評価・達成の確率

	達成年齢		コントロール		達成の確率	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
大学を卒業する	22.5	0.81	4.5	0.77	91.6	6.80
親の家から出て、自分のアパート・家に住む	22.8	3.38	3.9	1.15	77.8	14.98
正規雇用の仕事に就く	23.3	2.03	3.9	0.97	81.2	14.17
自分の行為の結果に責任をもつ	23.4	3.54	4.3	0.76	79.3	20.07
恋愛関係を維持、発展させる	23.6	3.65	3.4	1.09	60.6	18.97
親から情緒的に独立する	23.8	4.08	4.1	0.94	77.2	18.61
自分の感情をうまくコントロールする	24.0	5.88	4.2	0.96	72.9	20.14
他人の影響を受けずに、自分の信念や価値を決められる	24.5	6.51	4.0	0.98	70.1	20.98
経済的に自立する	25.4	6.22	4.0	0.95	81.5	17.64
趣味を楽しむ	26.2	11.15	4.4	0.84	78.1	15.76
結婚する	28.1	6.53	3.2	1.15	64.7	20.33
子どもをもつ	28.8	2.48	3.2	1.22	63.2	18.51
人間として成長する	28.9	11.04	4.2	0.95	77.2	16.82
自分にとって天職を見つける	28.9	7.51	3.3	1.22	58.4	26.02
自分の親を経済的に支援する	31.0	6.87	3.7	1.09	64.1	22.29

3) 性差についての検討

男女の回答傾向の違いについて、重要度、コントロールに関しては χ^2 検定で、達成可能性に関しては、t検定で検討した。その結果、有意差が認められたのは、重要度、コントロール、達成可能性のいずれにおいても「大学を卒業する」の1課題のみであった（重要度（ $\chi^2=18.05$,

df=4, $p<.01$)／コントロール ($\chi^2=14.67$, df=4, $p<.01$)／達成可能性 ($t=-2.129$, df=133, $p<.05$)。具体的には女性は男性に比べて大学を卒業することを、より重要であり、達成可能性が高く、コントロール可能であると回答していた。

3. 総合考察

調査の結果、現代の大学生にあっても、その描かれる将来像からはハヴィガーストが挙げた青年期・成人期の発達課題が見てとれた。しかしながら、一方で、そうした課題の達成を妨げる社会の現実がある。以下では、調査結果と社会状況に関する統計を比較し、青年期・成人期の発達課題について考察したい。

1) 経済的自立と職業に就くこと

2つの調査の結果から、「経済的自立」は、おとなとみなされるために必要な課題であり、また、将来、達成したい課題としても重要であると考えられていることが示唆された。

しかしながら、経済的な自立をどのように達成するかと関連が深い「正規雇用の仕事」に関しては、必要性、重要度共に「経済的自立」よりも低く評価されていた。また、「経済的自立」「正規雇用の仕事」共に将来的な達成可能性は約80%と評価されていた。

現在の大学生の卒業後の進路についてみると「一時的な仕事に就いた者（臨時的な収入を目的とする仕事に就いた者：アルバイト・パートなど）」と「その他（家事の手伝いなど就職でも“進学者”や“専修学校・外国の学校等入学者”等でもないことが明らかな者）」を合算すると平成20年で12.9%、平成21年では14.4%となっている（表8）。つまり、7～8人に1人は卒業後の進路が未決定なまま大学を卒業していくのである。もちろん、こうした若者の中には、“希望する進路のために次の入学時期や就職時期までといった期間限定の見通しを持って”、あるいは、“自分の夢のためにあえて”一時的な仕事を選択した者なども含まれる。しかしながら、少なくない割合で、卒業後の進路が曖昧なまま社会に出て行く若者がいることもまた、現実である。加えて、平成20年版青少年白書（内閣府）では、「正規の職員・従業員以外の雇用者の比率は、平成4年頃から急増し、平成19年では、20～24歳で43.2%と、他の年齢層に比較して高い水準にある」ことが指摘されている。こうした時代にあっては、「職に就く準備」をしたとしても、「職業生活をスタートさせる」ことができるかどうかには不安は大きい。こうした社会状況が今回の調査の結果における達成可能性に影響していたと考えられる。

表 8 大学卒業後の進路

大 学	計	一時的な仕事に就いた者	その他の者
平成20年 3 月	555,690	11,485 (2.1%)	59,791 (10.8%)
平成21年 3 月	559,539	12,991 (2.3%)	67,894 (12.1%)
短期大学	計	一時的な仕事に就いた者	その他の者
平成20年 3 月	83,900	3,215 (3.8%)	8,400 (10.0%)
平成21年 3 月	78,056	3,450 (4.4%)	9,037 (11.6%)

単位：人／（ ）内は全卒業者に占める割合

また、雇用形態別の賃金を比較すると「正規の職員・従業員」と「正規の職員・従業員以外の雇用者」では、年齢と共に賃金格差が広がり、また、雇用の継続が難しくなるなど、安定した経済的自立は困難となる可能性が高い。「経済的自立」は、“おとな”とみなされるために必要な課題であり、また、将来、達成したい課題としても重要であると考えられているが、経済的自立が達成されない状況にある場合、おとなになることをどのように考えれば良いのだろうか。こうした現実には、「青年期の終期はおとなになったとき」、つまり成人期に移行したときとする青年期から成人期への移行の境目をより曖昧にものとしていいると考えられる。

2) 結婚と子育て

成人期の課題のうち、家庭をつくることに関する課題は大きな部分を占めている。すなわち、「配偶者を選び、結婚すること」「子どもをもつこと」などである。しかしながら、今回の調査においては、“おとな”とみなされるための必要性も、また、将来、達成したい課題としての重要度も他の課題と比較して低い評価となった。

結婚に関しては、国勢調査から算出された生涯未婚率は1970年以降、急速に上昇しており、1970年には男性では1.70%だった生涯未婚率は、冒頭でも述べたように2005年時点では15.96%と約6人に1人は1度も結婚をすることなく50歳を迎えている（女性に関しては、男性よりも緩やかな上昇であるが、約14人に1人である：表9）。また、平均初婚年齢も一貫して上昇しており、男性に関しては、1990年度ですでに30歳を越えており、女性に関しても30歳に近づいている。

なお、女性の平均初婚年齢が上昇するということは、出生したときの母親の平均年齢も遅くなるという晩産化の傾向につながる。少子化社会白書（2009）によれば、「2007年の場合、第1子が29.4歳、第2子が31.4歳、第3子が32.9歳であり、ほぼ30年前の1975年と比較すると、そ

表 9 生涯未婚率並びに平均初婚年齢の推移

年次	男 性		女 性	
	生涯未婚率 (%)	平均初婚年齢 (歳)	生涯未婚率 (%)	平均初婚年齢 (歳)
1970	1.70	27.5	3.34	24.7
1975	2.12	27.7	4.32	24.5
1980	2.60	28.7	4.45	25.1
1985	3.89	29.6	4.32	25.8
1990	5.57	30.4	4.33	26.9
1995	8.99	30.7	5.10	27.7
2000	12.57	30.8	5.82	28.6
2005	15.96	31.1	7.25	29.4

それぞれ3.7歳、3.4 歳、2.6歳遅くなっている」と報告されている。

今回の調査から分かるように、年齢的には、早ければ20歳で、また遅くとも「30歳まで」にはおとなとみなされると考えている現代の大学生にあって、男女の初婚年齢が30歳前後であること、第1子を出産する母親の平均年齢が同様に30歳前後であることを考えると、結婚ならびに子どもをもつことをおとなの要件としないことは、現実を反映した理解といえるのかもしれない。

4. 今後の課題

本考察では、職業に就くこと及び結婚・子どもを持つことに焦点をあてて検討した。しかしながら、こうした課題を誰もが達成するとは限らない現状において、“おとな”であることは、より精神的な成熟に求められていくのかもしれない。青年期・成人期の発達課題について、今後は、こうした側面からの分析を深めることが必要といえよう。

また、今回の分析では、性差をあらかじめ見込んだ課題を除けば、性差に関する有意差が認められた課題は少なかった。ただし、子どもを持つことに関しては、男性よりも女性においてその必要性が低く評価されていた。両者にはライフサイクルにおける差があること考慮すれば、こうした点を含め、今後、より詳細な分析が必要といえる。

引用・参考文献

Arnett, J.J. (1997). Young people's conceptions of the transition to adulthood. *Youth and Society*, 29, 3-23.

Arnett, J.J., & Galambos, N. L. (Eds.) (2003). Exploring cultural conceptions of the transition to adulthood. San Francisco: Jossey-Bass.

Esther S. Chang, Chuansheng Chen, Ellen Greenberger, David Dooley, & Jutta Heckhausen (2006) What Do They Want in Life?: The Life Goals of a Multi-Ethnic, Multi-Generational Sample of High School Seniors (2006) Journal of Youth and Adolescence, Vol. 35, No. 3, pp. 321-332.

国立社会保障・人口問題研究所 (2008) 人口統計資料集

児玉憲典・飯塚裕子訳 (1997) 『ハヴィガーストの発達課題と教育』川島書店

内閣府 (2010) 平成22年版 子ども・若者白書

文部科学省 (2009) 学校基本調査

文部科学省 (2010) 学校基本調査

内閣府 (2008) 平成20年版 青少年白書

厚生労働省 (2010) 平成21年賃金構造基本統計調査

内閣府 (2009) 平成21年版 少子化社会白書